

ITと古代ギリシア・ローマ文化

金沢大学工学部 情報システム工学科 教授 安村 典子

ITの中で使われている用語には、ギリシア神話から借用したものが数多く見られる。新しい発見や発明が行われてその名称をつける必要が生ずると、西欧の人々は古代ギリシア・ローマの文化の中に、その類型を見い出そうとするかのようである。

アポロ13号の司令船「オデッセイ」

例えばアメリカの宇宙船アポロ13号の司令船の名前は「オデッセイ」と名付けられたが、これは古代ギリシアの叙事詩『オデュッセイア』を英語風に発音したものである。『オデュッセイア』は、紀元前7、8世紀ごろに作成された世界最古の叙事詩のひとつで、主人公オデュッセウスの冒険物語である。オデュッセウスはトロイア戦争後、エーゲ海を渡って故郷イタカへ帰国する際に、海神ポセイドンの恨みをかっただために、様々な苦難を強いられる。しかしそれらを智慧と勇気で克服し、10年後に無事に故郷に帰り着くことができた。アポロ13号の司令船が「オデッセイ」と名付けられたのは、「困難を智慧と勇気で克服する」ことへの期待もあるだろうが、一番のポイントはおそらく、「故郷へ帰る」というモチーフであろう。『オデュッセイア』の全編を貫く主題は、魔女キルケーの策略や、美しい仙女カリュプソーの誘惑にも負けず、主人公がひたすら故郷をめざし、妻のもとへ帰る、というものである。そのように、アポロ13号の司令船も、無事に地球に戻ることを願っての命名であろうと思われる。宇宙船のなかでも、月に置き去りにされる部分には別の名前がつけられ、地球に戻ってくる部分のみ「オデッセイ」と名付けられたということは、この点が明確に意識されていることであろう。

認証方式「ケルベロス」

コンピューターネットワークの認証方式のひとつである「ケルベロス」も、ギリシア神話からの命名である。ギリシア神話の

ケルベロスは冥界の入口を守る番犬で、3つの頭をもち（一説では50、あるいは100頭）、首の周りには無数の蛇が生えており、尾も蛇であったという。生者が冥界に入らないよう、また死者が再び現世に戻ることがないように、つまり不適切な者の侵入がないように通行を見張る犬であるから、ネットワークの暗号方式としては、適切な命名といえよう。しかしケルベロスは、このおそろしい外形にもかかわらず案外弱くて、ギリシア神話では2回も失敗例が伝えられている。ひとつはオルフェウス（音楽の創始者といわれる）の奏でる音楽に眠ってしまい、生きているオルフェウスを冥界に入れてしまったこと、もうひとつは力持ちで名高い英雄ヘラクレスに鎖でつながれてしまい、あろうことか現世に引きずり出されてしまったこと、の2例である。つまり、通常の人間に対しては十分な守りであるが、（文武両方の意味において）人並みはずれた能力の持ち主に対しては、完璧な防衛にならないということの意味している。その点でも、ネットワークの認証方式としてはきわめてよく現状と合っており、命名者がそこまでギリシア神話を理解して命名したとすれば、まことに見事な命名というほかない。

キリスト教の神学用語「ユビキタス」

近頃よく聞かれる「ユビキタス」の原意は、ラテン語の副詞ウビクエ (ubique, どこでも、の意) である。これは現代の命名ではなく、キリスト教の神学用語として既に17世紀頃から用いられていた。「復活したキリストの栄光の身体は、時間、空間的制約を越えて遍在する」という意味で語られていたのである。

理系・文系を越えて 真の教養を身につける

このような古代ギリシア、ローマから借用した言葉が多いのは、西欧社会がギリシア・ローマ文明をその源としているということ、しかもそのことを、現代に活躍する西欧の研究者たちが、良く理解しているということであろう。彼らにとってギリシア・ローマ神話は、幼い頃から慣れ親しんだ物語でもあり、また、文系、理系を問わず、学問を志す者であれば当然知っていなければならない教養でもあるといえよう。翻って日本の工学の状況を考えると、技術は世界に誇れるレベルであるものの、真の教養を身につけた知性あふれる人材が育てられているとは言い難い。日本の研究者たちが世界にはばたいてゆき、世界の人々と対等の議論をしてゆくためには、理系であっても、文系の学問に対する知識と理解が必要とされるであろう。そのような意味で、工学系の多くの人々が西洋古典学に興味をもち、2500年を経ても変わらぬ価値をもつギリシア・ローマ文化の深い人間理解にふれることができるようにと、願ってやまない。

